

阿波の藩学

竹治貞夫

一

近世阿波藩の設立した学校については、『日本教育史資料』
卷七（文部省編、明治三三年刊）に「旧徳島藩」（徳島県取調）
の項があつて、次のように記されている。

校名 学問処ト称ス。

校舎所在地 初、寺島巽浜（後、郡代役所ヲ設ケシ所ニシテ、
今、堀裏町ト云。）ニ建設シ、後、寺島本町ニ移ス。

沿革要略 寛政三年四月ノ創設ニシテ、其興隆ノ原因ハ、
是ヨリ先、藩主重喜ノ世、宝曆中、集堂安左衛門、名
ハ元成ナル者、学校ヲ興サンコトヲ請ヒ、且学制五条
ヲ陳ズ。藩主之ヲ善トシ、而シテ果行セザリシガ、其
後、寛政元年ノ頃、合田栄蔵、名ハ立誠、柴野平次郎、
名ハ允升、那波主膳、名ハ師曾等、亦建議、学校ヲ興
サンコトヲ請フ。然ルニ当時ノ藩主治昭学ヲ好ミ、専
ラ人才發育ノ道ヲ振起セント欲シ、会々曩者ノ集堂安

左衛門ノ建議ヲ思ヒ、遂ニ合田栄蔵等ノ建議ヲ採用シ、
以テ本校ヲ寺島巽浜ニ設置スルニ至リシナリ。後寛政
十二年ノ頃、寺島本町ニ移転シ、爾来大ナル変革ナク、
明治二年正月ニ至リ、長久館開設ニ付、西丸ヘ移セリ。
『阿波国教育沿革史』（徳島尋常師範学校編、明治三五年刊）
にもほぼ同じ記事が見え、以来『徳島県史』第四卷（昭和四〇
年刊）をはじめ多くこれに拠っている。

しかし右の記事中、寛政元年の頃に合田立誠、柴野允升（碧
海）、那波師曾（魯堂）の三人が、そろつて建議したように言
うのは、まず有り得ないことである。柴野碧海はその前年であ
る天明八年に、養父栗山が幕府に登用されたのに伴つて阿波藩
儒としての家督を相続していたが、まだ十七歳の少年で江戸に
おいて修業中であり、また那波魯堂はこの年九月に六十三歳で
病死しているからである。『県史』は三人の建議を寛政三年の
こととするが、すると魯堂の死後のこととなり、ますます有り
得ないことである。

次に堺裏町から徳島本町への移転を、寛政十二年の頃とするのも正しくない。それより後の享和元年十二月に徳島に赴任した柴野碧海は、堺裏学問所への出勤を命ぜられている。国立史料館に蔵する「蜂須賀文書」（東京大学出版会刊）『徳島藩職制取調書抜』上巻、一六〇頁に、

文政元寅年五月九日

一 堺裏学問所之義、寺島医師学問所へ御都メ被仰付候。

一 堺裏学問所之儀、御郡代所ニ被仰付候。

同二卯年十一月九日

一 此度堺裏学問所、寺島江御引移ニ付、御場所指支、

当時休会ニ相成居申候処、右御普請出来ニ付、来ル十七日開講被仰付候。

とあり、実際の移転はそれから約二十年後の文政二年のことである。移転先は医師学問所の地であった。

医師学問所は寛政七年五月、沖洲船戸南の小原春造の賜邸（今の北沖洲二丁目）に創設されたが、同文書に依ればその地が遠くて不便なため、文化元年五月寺島本町に移転していた。ところが学問所がここに移ってきたので翌文政三年十一月に安宅天文台役所（今の大和町二丁目、徳島東工業高校の地）に移転した。従来の文献に、文化四年沖洲から直接安宅へ移転したように記すのは誤伝である。

さて堺裏町巽浜に創設された学問所の跡は郡代役所となったが、その位置は幕末の地図を見ると富田の渡し場（今の富田橋附近）の西側にある。移転した寺島本町の校舎の位置は、今の

寺島本町東一丁目で、東端の銀札場の西隣りであり、北側は寺島川（今は埋め立てられて鉄道線路となっている）を隔てて徳島城に相對していた。

学問所の教官は、最初は京住みの藩儒合田氏四代目立誠一人だけであつたが、やがて横野多門次（鏡山）がこれを助け、合田立誠が休暇で帰京すると那波与蔵（那波家二代綱川）が代つて教授した。幕末に藩儒に登用された新居水竹は、その日記「水竹居日記」（徳島文理大学蔵）の慶応元年六月末に、「学問所」と題して次のように記している。

寛政三亥年四月廿六日、御仕置長門殿（賀島政徳）より被仰出、堺裏御用屋舗におゐて、御家中諸士、并末々（に）至迄、学問出精為励（励みのため）、講釈被仰付候間、相勤可申候段、被仰出候。合田栄蔵江。

○寺島に御移ニ相成候ハ、文政二卯年十月廿一日也。開講ハ十一月十七日。

○講師初ハ合田耆人。寛政三亥十一月十日、横野多門次（鏡山）被仰付、合田栄蔵（立誠）引続相勤候処、同四子年八月廿三日、合田帰京ニ付、那波与蔵（綱川）為代（代りとして）被仰付候。

また学問所の教育内容については、阿波藩儒として最後の人であつた岡本斯文（大正八年没、七十七歳）が、大正四年七月に記した「徳島藩学事略」（大正五年徳島県発行『御大典記念阿波藩民政史料』七三三頁収）に、

学校は寺島本丁にありて学問処と称せり。学派は徳川氏に

定めたる制度により朱子学にして、中村惕斎の鈔説〔四書鈔説〕等〕及び示蒙〔四書示蒙句解〕等を尊崇し、小学・近思録・四書を主とし、五経は易・詩の外は用ひず、又詩文は教へず。

という。藩儒増田氏の初代立軒は、京都の大儒中村惕斎の高弟で、彼の樹立した学風が学問所において一貫して継承されたことがわかる。

なお淡路にも寛政十年に洲本水筒町南詰に学問所が設立され、江戸藩邸では幕末に近い安政三年に、藩学長久館が八丁堀邸内に造られた。長久館については、岡田鴨里著『蜂須賀家記』巻四に、

（安政三年）九月、長久館を八丁堀邸に造る。漢学・蘭学及び算術・量地術より、劍・槍・弓・馬・洋砲に至るまで、科を分つて各おの教師を置く。年寄蜂須賀喜軌（山城）、仁尾永捷（内膳）等に命じて総奉行と為し、邸中の子弟をして之を講習せしむ。二十八日開講し、公親ら館に臨む。

（原漢文）

と見える。八丁堀邸は南八丁堀にあり、今の東京都中央区湊一丁目に当たる。公は当時の藩主斉裕公である。

しかし長久館の実際の開学は、これより約半年早い四月に行われたことが、新居水竹の『水竹居日記』安政三年四月末に記す次の記事によって知られる。

江戸八丁濠邸に、新たに学館を建て、名づけて長久館と曰ふ。本月（四月）七日開業し、那波文学（藩儒那波氏三代

鶴峰）が大学第一章を講じ、桂射師（弓術師範桂卯之丞勝重）が鳴弦の儀を行ふ。其の館中には漢・蘭同学、射・銃・劍・槍場、習字学を置き、皆之が師長を立つ。（原漢文）
この長久館は、文久二年に藩士が江戸を引き上げて帰国したため廃校となったから、前後わずかに七年間でその教育活動を終えている。

明治二年正月旧来の儒職は廃せられ、新たに西丸に学校（長久館）を設置すると共に、学校教授官・助教が任命された。その劇的な変革の状を、学校教授官（後に学頭）となった新居水竹は、『水竹居日記』に次のように記録している。（原漢文）

（明治二年正月十五日）晴、辰牌登朝。礼装を服し、同僚皆召さる。巳牌、佐渡執政（佐渡氏十一代左近長宜）府に坐す。柴野介（介三郎、柴野氏三代竹斎）父子を召し、儒職を免じ、子（辰太郎惟徳）を以て秩を襲いで与士と為し、致仕せしむ。次に那波連（那波氏四代親北）を召し、儒職を免じて学校奉行と為す。次に岡本堅（堅三郎、晤室）・橋本矢（矢五郎、晩翠）を召し、儒名を改めて学校助教と為す。次に高鋭（高良斎の子鋭一、雲外）を召し、儒職を免じて洋学教授、兼訳官刊版卒と為す。次に謙（新居水竹）を召し、儒名を改めて学校教授官と為し、与士に班し、秩百石に改め、家知事の准席に置く。現任は後に伝へざるなり。次に柴幸（柴秋邨）を召す。病を以て山内弘に代る。儒職を免ず。次に四十宮三（三平、石田）を召す。儒名を改めて助教と為し、月俸一口・歳俸二石を賜ひ増す。

轉吏司読武知剛（剛太郎、道翁）は助教に擢んで、月俸二口・歳俸三石を増す。米本徳（徳次郎、観翁）・市川喜（喜馬太、道寧）・斎藤柳（柳蔵、宜安）・福良貞（貞之助、徳洪）は皆免す。

○執政・参政、学校を巡検し、余及び宰（詔官刊版宰の高銳二）をして同に西城に往かしむ。西城を学校と為し、莊麗人をして畏敬せしむ。

この時の人事異動が、眼前に見るように描出されている。二日後の十七日に、次のごとく開講式が行われた。

（正月十七日）^{あたなか} 喧。辰牌学校に入る。是の日開筵、皆礼装を服す。藩士の聴く者、堂に容りきらず。巳牌、公（茂詔公）臨み、三公子皆至る。余は孟子万章上篇「人言ふ有り、禹に至りて徳衰ふと」の章を講ず。簿（出席の名簿）^{ふちまつ}を上るもの六百三十員。講じ畢りて片鱗^{かたあわび}を賜ひ、聴者に及ぶ。

水竹がこの開講式に講じた孟子の一章の内容は、天子の位を堯と舜は己の子に伝えず賢者に伝えたが、禹に至って己の子に伝えるようになったのは徳が衰えたものであるという説に対して、孟子が、賢に伝えるのも子に伝えるのもみな天命に従つたまでで、堯舜と禹とは徳の相違はないと反論したものである。おそらく水竹は、明治維新によって天下の政權が幕府から朝廷に移つたことを、孟子の天命説によって解説したものであろう。こうして徳島城西丸に設立された新しい藩学長久館は、その後次第に組織・教官ともに整備せられ、徳島文理大学本部に蔵

する「新居水竹文書」中の「徳島藩官員録」（明治二年八月七日改正より後十二月二至ル間）と注すの「総学司」の項には、

学頭 新居与一助（水竹）

文学教授 岡本堅三郎（晤室）、橋本矢五郎（晩翠）、四十

宮三平（石田）、武知剛太郎（道翁）、柴六郎（秋邨）

学館管事 那波連（観北）

文学助教 渡辺衡平（桂城）、岡久惣之助（桂堂）、前川潤

太郎（澹斎）、四十宮哲太郎（北邨）

右の文学は漢学の意である。その外に、国学教授・兵学教授・医学教授・洋学教授等の科目・教官名が列挙されており、今日の総合大学に類するものとなっている。しかし明治四年七月、廃藩置県とともに廃校となつたので、長久館の教育活動はわずかに二年半で終つてしまつた。その後明治七年五月に、師範期成学校がここで開校され、翌年師範学校と改称された。師範学校は明治十八年火災によって富田浦（今の県庁の地）に移り、更に明治三十二年常三島の地に移転して、昭和二十四年徳島大学学芸学部となり、以後教育学部から総合科学部へと変遷し、発展して今日に至つた。

二

徳川幕府の支配した近世日本では、その文教政策によって、中国の古典学である漢学が学問の王座を占め、孔子を祖とする儒教が倫理思想の中心となり、また漢語によって綴られた漢文・漢詩が、知識階級の普遍的な文章・文芸となるに至つた。

この漢学・儒教・漢詩文の指導的な担い手となったのは、幕府をはじめ各藩に置かれた儒官である。

阿波藩は二十五万七千石を領した蜂須賀氏が、近世を通じて支配した四国最大の雄藩である。家政公から数えて四代目藩主光隆が、寛文年間に京儒の名家合田昌因を招聘したのを始めとして、増田立軒・柴野栗山・那波魯堂・立木信憲が相次いで高禄世襲の藩儒として登用せられ、これらの五家が子孫相承けて藩の文教・学芸に指導的役割を担って明治維新に及んでいる。

徳島大学図書館に蔵する『阿波藩蜂須賀家臣成立書併系図』（二四九冊）は、約一七〇〇家に及ぶ阿波藩士が藩府に提出した各家の履歴書を集めたものである。

藩士の資格は、俸禄を「高〇〇石」と表記する上級の高取と、「〇人扶持支配〇石」と表記する下級の扶持米取との二つに大きく分かれている。高何石というのはいわゆる表高で、神河庚藏氏著『阿波国最近文明史料』（九八頁）に、「百石の禄も得る所は三分の一、即三十三石余なり」とあり、阿波藩ではその実収は三分の一とされていた。（稲垣史生氏『時代考証事典』）によれば、幕府の旗本の表高に対する実収は、十分の四であり、従って三千石の旗本といえは、実収は四割の千二百石である。これに對して、何人扶持支配何石という方は実収を示すもので、神河氏『文明史料』に、

扶持とは一人米五合なり。故に三人扶持なれば一月四斗五升なり。支配十石とは、一年に扶持の外に米十石給せらるるなり。此給与法は、夏冬二季とす。夏は麦十石、冬は米

五石なり。現物に非して、麦米の手形を給せらる、之を指紙さしがみと云ふ。

と見える。つまり一人扶持は年額（三百六十日で計算される）一石八斗である。支配は今日のボーナスのごとく、年二回に分けて扶持に加えて支給される。扶持米取の最高は、五人扶持十石を賜る大小姓格の藩士で、その年収は十九石であり、他はそれ以下の微禄である。

近世を通じて高取の藩儒となったのは前述の五家のみであり、その石高は次のごとくであった。

合田氏（初代昌因以下六代） 現米一五〇石（高四五〇石相当）

増田氏（初代立軒以下六代） 高二〇〇石

柴野氏（初代栗山以下三代） 高一五〇石

那波氏（初代魯堂以下四代） 高一五〇石

立木氏（初代信憲以下三代） 高一〇〇石

合田氏は京都住みであったせいか、現米何石という特殊な表示が行われているが、これを表高に直せば四五〇石に相当し、最高の待遇であった。この五家以外は、

岡田氏（寧処・南州） 五人扶持支配十石

横野氏（鏡山・石花） 四人扶持支配八石

前川氏（秋香・澹齋） 五人扶持支配十石

米本氏（政助・観翁） 三人扶持支配七石

岡本氏（遜齋・晤室） 五人扶持支配十石

多田氏（直次・文蔵） 五人扶持支配十石

四十宮氏（月浪・石田） 四人扶持支配八石

安芸氏（思温） 五人扶持支配十石

橋本氏（晩翠） 五人扶持支配十石

新居氏（水竹） 五人扶持支配十石

のごとく、著名な儒家も少なくないが、いずれも少祿の扶持米取であった。

高取の藩儒五家は、今日の大学でいえば教授の地位に相当し、それが世襲によって継承せられ、近世阿波漢学史の根幹を成している。そこで以下、各家の系譜と、主要人物の遺著等について概観しておきたい。

三

1 合田氏

三宅寄齋

（合田氏）道乙
└─ 三宅衝雪
 └─ 合田昌因⁽¹⁾─昌澄⁽²⁾─昌孝⁽³⁾─温⁽⁴⁾─立誠⁽⁵⁾─立礼⁽⁶⁾─立功

合田氏の初代昌因（字は仲循、通称は厚元、晴軒と号す）は、阿波藩儒官の第一号となった人物である。父の道乙（初名は宅昌、字は子燕、鞏革齋と号す）は、京儒の名家三宅寄齋（名は島、字は亡羊、寄齋と号す）に学び、その継嗣となつて三宅氏を称した。長男昌尚（字は伯省、衝雪と号す）がその後を承け、昌因は次男で父の生家合田氏を称し、寛文元年（一六六一）二十四歳のとき、四代藩主光隆の招聘を受けて阿波藩儒となった。

京住みの仕官で、子孫六代連綿として直系の者が継承しているのはみごとであり、他に例がない。

昌因は詩文に長じ、徳島城南の竹林院を開いた詩僧鉄崖、および今日文化の森として開発されている八万町向寺山に別荘延生軒を営んだ家老長谷川伊豆貞長等と、元禄時代を中心にして唱酬し、「延生軒景境之引」等の詩文六篇（詩五首と文二篇）を残している（竹林院文書、岡田亀太郎氏編『阿波国元禄時代の風物詩』収）。

昌因の著作として、五代藩主綱通の命を受けて撰した『藩公年譜』があり、藩祖蜂須賀正勝の父正利より四代藩主光隆に至る六世の間の詳細な年代記で、岡田鴨里著『蜂須賀家記』の引用書目に「合田厚元撰述年譜」として掲げられている。しかし今は佚して、わずかに増田立軒撰『渭水聞見録』巻一に二条、同巻二に七条の引用文を存するのみである。

昌因の学殖文藻を見るべき最大の資料は、京都市鷹峰の三宅氏墓地に現存する、父三宅道乙および兄伯省（衝雪）の墓碑銘である。道乙墓碑銘は墓表の文としては稀に見る長文で、文体としては行状に類するものである。三宅氏祖宗の世系事跡から始めて、父道乙の生年・就学・學術・事業を細叙し、更にその人物・才学・德行を状すること詳実を極め、最後に二十句より成る銘辞を係けている。後に述べる増田立軒の『惕齋先生行状』と並んで、阿波漢学史上伝記文学の双璧と称してよいであろう。伯省墓碑銘もまたこれに次ぐ長篇で、深情のこもった秀作である（ともに拙編『阿波碑文統集』収）。昌因は八十四歳の長寿を

保って、享保六年（一七二一）に京都で没した。

子孫六代の内では、三代温（字は如玉、通称営治、天明元年一七八一没、年五十七）と、四代立誠（字は伯業、通称は栄蔵、榕齋と号す、文化八年一八一四没、享年不詳）が著名である。温の妻は大儒皆川淇園の姉であり、淇園の父皆川拙元の墓碑銘は温の手筆である。彼は諸儒と広く交わり、当時京都に在住した柴野栗山、次いで那波魯堂を阿波藩に推挙して、藩儒柴野氏および那波氏が成立するに至った。その紹介の功は大きい。

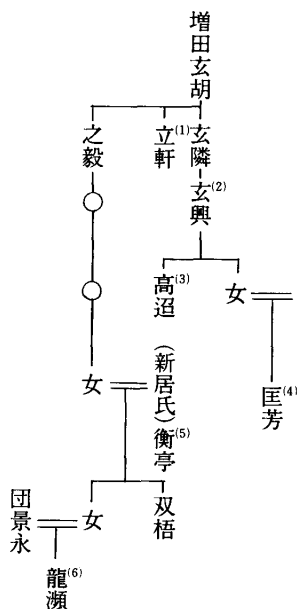
また立誠は寛政三年（一七九二）藩の学問所開設に当たって総裁・教授の任に就き、前後十二回も阿波と京都の間を往復して、藩の教学の振興に尽くしている。

六代立功（通称は繁之丞、また左源次）は従来その経歴が知られなかったが、新居水竹の『水竹居日記』にしばしばその名が出現し、幕末の藩政上に活躍している。彼は嘉永年間に古賀謹堂（精里の孫で伺候の子）の門に入って昌平黌に学んでおり、嘉永三年（一八五〇）五月、新居水竹はその紹介によって古賀氏に入門したことが、日記に詳記されている。文久二年・三年の国事多難であった際には、水竹・立功ともに藩の重責を担って、京都・江戸の間を何度も文字通り奔走した状が、同日記によってうかがわれる。京都鷹峰の合田氏墓地に墓があり、「明治十五年四月十四日卒」と刻する。享年は不詳である。

合田氏は初代昌因より六代立功に至るまで、京都在住の藩儒という特殊の地位に在り、阿波藩の文教水準の向上に貢献するところが大きかった。

2 増田氏

長谷川興澄



増田氏の初代立軒は、名は謙之、字は益夫、通称は初め文内、後に平内と改め、立軒と号した。その父玄胡（策庵）は藩医増田氏の三代目（高二百五十石）で、彼はその二男である。元禄四年十九歳のとき京都に遊学して、大儒中村惕齋の門に入り、同十五年惕齋が没するまで十二年間その薫陶を受け、ついに師家の養子となつて惕齋の没後その学塾を相続した。しかし宝永五年三十六歳のとき帰藩して御儒者に任用せられ、後に家禄二百石を賜つて、藩儒増田氏の祖となつた。

立軒は子が無く、兄の子玄興（字は伯志、通称勇助）を養子とし、その子高道、外孫匡芳と継承したが、三代・四代ともに夭逝して、ついに血統が絶えた。そこで藩命により儒医新居莊甫の弟衡亭（名は希哲、通称哲次、衡亭と号す）が五代目となつて再興した。衡亭の嫡子双梧（道太郎）は江戸に出て別家を立つて、外孫の龍瀨（幸之介）が六代目を継いだ。龍瀨は慶応二年

正月に三十九歳で没し、嗣子希周は儒職に就かず、藩儒増田家は明治維新を待たずして終りを告げた。

立軒は不世出の朱子学者中村惕斎に師事してその衣鉢を伝え、遺命によって未修未刊のまま残された大量の師著を補修刊刻し、また自らも優れた著作の数々を残している。現存する彼の編著書を分類して示せば、左のごとくである。

(一) 師著を校点刊行したもの

- 1 四書鈔説 一二卷一二冊
- 2 五経筆記 六三卷四九冊(徳島市立図書館に全巻の写本を蔵する。「春秋」以外はすべて刊行された。)
- 3 詩経示蒙句解 一八卷一〇冊

- 4 惕斎先生文集 一三卷一一冊(未刊、九州大学図書館蔵)

本文庫蔵

(二) 師説を編集刊行したもの

- 5 孝経刊誤集解 一卷一冊
- 6 講学筆記 三卷一冊
- (三) 師説に和文の注解を加えたもの

- 7 慎終疏節聞録 四卷一冊(写本、無窮会神習文庫蔵)
- 8 追遠疏節聞録 一卷一冊(写本、内閣文庫・無窮会神習文庫蔵)

- 9 入学紀綱句解 一卷一冊、刊本

(四) 立軒自身の著述

- 10 惕斎先生行状 一卷一冊、刊本
- 11 仲子語録 六卷一冊(写本、九州大学碩水文庫蔵。内閣

文庫蔵本は第六巻を欠く。)

- 12 渭水聞見録 四卷四冊(写本、内閣文庫に増田衡亭書入本を蔵す。)

- 13 聞録周易伝義 一二卷一二冊(写本、徳島大学図書館蔵)

立軒は寛保三年(一七四三)に七十一歳で没したが、彼の樹立した学問が後に設立された藩学問所で長く継承されたことは、前述のごとくである。また師惕斎の著書を補修して公刊した功績は、日本漢学史上に特筆しなければならない。五代衡亭は阿波版通鑑綱目の刊行を督し、六代龍瀬は幕末に勤王派として、新居水竹等と国事に奔走している。

3 柴野氏

柴野軌達 — 栗山¹⁾

貞穀 — 碧海²⁾ — 竹斎³⁾

柴野栗山は隣国讃岐牟礼の八栗山下に生まれ、宝暦三年十八歳のとき江戸に出て昌平黌に学んだ。在校は十三年の長きに及び、明和三年三十一歳のとき京都に移って更に国学を高橋因南に学び、翌明和四年三十二歳の秋、阿波侯に仕えて藩儒となった。

藩主は好学英邁の十一代重喜公で、大いに内政の革新を謀ったが、老臣たちの反対に遭って成功せず、明和六年幕府より隠退を命ぜられた。しかし彼の学芸愛好の施策は実を結び、特に栗山の招聘は、後の阿波藩の文運興隆に大きく寄与することに

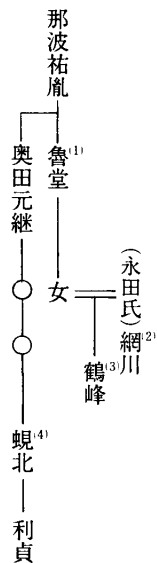
なった。歴代藩主中、英邁好学でその在職期間も長期にわたり、自ら文武の治政に精励したものは、十二代治昭、十三代斉昌の父子二代を最とするが、栗山は世子侍読として治昭公を十二歳の時から輔導啓沃し、その嗣碧海は斉昌公を九歳の時から養育薫陶した。この両名君を養成した柴野氏二代の功績は、特筆に値するであろう。

栗山は天明八年五十三歳の正月、幕府の儒官に登用されて藩を去ったが、阿波侯および藩士との親交は生涯にわたっている。文化四年（一八〇七）没、享年七十二。『栗山文集』六卷五冊・『栗山堂詩集』二卷二冊（また写本四卷四冊）があり、その雄渾暢達の詩文は文壇に大きな影響を及ぼした。

二代目碧海（天保六年一八三五没、年六十三）は、豊かな天分に恵まれて家学を継承し、文化・文政の文運極盛の時代に際会して詩文の才を縦横に發揮し、後輩の那波鶴峰をして、「栗国の文章機軸改まる」と感嘆せしめた。彼の詩文を集めた『枕上初集』（詩四卷二冊・文六卷二冊）および『枕上後集』（詩二卷一冊）は、阿波一国にとどまらず、近世日本の漢詩文の詞壇に輝く存在である。三代竹斎に至っては強弩の末の感を免れないが、なお家声を保って明治維新を迎えることができた。

4 那波氏

那波氏の初代魯堂は、姫路の人であるが京都に出て門弟を教授し、魯堂塾の名声は世に高く、その門下から名儒西山拙斎、詩宗蒼茶山を出した。魯堂は初め岡白駒に就いて古注学を学び、



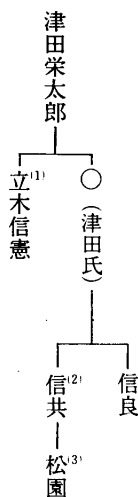
当時流行の古文辞を究めたが、やがて五代の祖那波道円（活所）以来の家学である宋学に復し、朱子の正学を提唱して『学問源流』を著した。また若年にして『春秋左伝』を校刊して学界を益し、明和元年三十八歳のとき朝鮮国の修好通信使節が来朝すると、接待使の随員となって大阪・江戸の間を一行と共に往復して、使節の製述官及び書記室と唱和し、『東游篇』を刊行した。安永七年五十二歳のとき、十二代藩主治昭の招聘に応じて儒員となり、やがて徳島に來任して大いに文教の向上に尽くした。寛政元年（一七八九）六十三歳で没したが、その間十余年、「勝瑞義冢碑」などの名作があり、『那波魯堂文集』（写本、故岩村武勇氏蔵）に徳島在住時代の文章をとどめている。

魯堂は男子が無く、女婿の網川が継いだ。その子三代目鶴峰は昌平塾の古賀精里・何庵父子に学び、また学問詩文に傑出していたが、その著『熙春堂集』五冊は惜しくも亡佚し、今日見られる遺作は数篇に過ぎない。鶴峰も子無く、魯堂の弟で奥田氏を継いだ元繼の曾孫蜷北が、大阪から迎えられて相続した。蜷北も幕末から明治にかけての詞壇に活躍した様子が、『水竹居日記』などによって窺われる。

那波氏は歴代粒ぞろいの人材が続き、ついに近代東洋史学の泰斗、京都大学教授利貞博士を出した。他家には見られぬ壮観

である。

5 立木氏



近世の阿波藩儒として高取の世家を成したものは、上述の合田・増田・柴野・那波の四家と立木氏とである。立木氏はその就任が最も遅く、家禄も百石で一番低かった。その事跡もほとんど埋没し、わずかに「成立書」(徳島大学図書館蔵)および初代信憲と三代松園の略伝(神河庚蔵著『阿波国最近文明史料』収)が存するのみで、彼らの著作の存在は知られていなかった。

しかし初代信憲(文政七年一八二四没、享年八十)は、天明五年二月、当時城南の大谷邸に隠居していた重喜公の儒臣として召し出されると、まもなく命を受けて『筆曲考』四卷(天明六年五月自序)を撰述し、その書が国会図書館等に現存する。本書は筆曲の組歌の詞句を詳細に考釈したものでその価値高く、昭和の初年高野辰之博士は『日本歌謡集成』巻八にこれを収録された。ただ著者の伝を不明としているのは残念である。

三代松園(文久二年一八六二没、五十三歳)は昌平黉の古賀侗庵に学ぶこと七年、十四代藩主斉裕公の儒臣として、多艱な幕末の世に公を輔翼した。従来松園の詩文は全く世に知られな

かったが、私は先年彼の曾孫の家に蔵する遺稿を借覧して、『阿波藩儒立木松園遺稿』(日記二篇、詩八一首、昭和五七年刊)を編してこれを公にした。

こうして立木氏三代の事跡と業績が明らかとなり、従って近世阿波の高取藩儒五家の全貌を、ほぼ把握することができたわけである。前述の最後の阿波藩儒岡本斯文に『修身小言』の著があり、その中に左のごとき記事がある。

柴野碧海先生が阿波国の儒官^たなりし時、余の祖遜斎、及び武知・四十宮の諸子は素読^た方^たなり。素読^た方の儒官に於けるや、其の差は猶ほ今の勅任と判任とのごとし。而るに先生は数子と交遊すること兄弟の如く、相会すれば必ず置酒し、而も其の肴は豆腐に止まる。云々。(原漢文)

これは柴野碧海の人がらが、身分にこだわらず謙虚でかつ質素であったことを称揚したものであるが、高取の儒官と扶持米取りの素読方^たとは、明治憲法下の勅任官、即ち高等官一、二等と判任官ぐらいの相違があったという。従って高取藩儒の權威は、今日の大学教授などよりはるかに高かったことが知られる。

以上が近世における阿波の藩学、すなわち藩校および藩の文教を担任した幹部藩儒の概略である。

本稿は、本学会第二回公開講演会における講演要旨をまとめたものである。